



Jマインド・イノベーション 日本人の心で再び開拓・創造の躍動感を

Hiroshi IIDA **飯田 汎** 放送大学客員教授



日本には失敗する余裕がない

日本のDNAを大切にしながら、世界の価値観を共有するという二つの軸をもった思考力が不可欠な今日の時代である。いま日本の過去・現在・未来を真剣に考えなければ、これから先も未来は失われたままとなるであろう。歴史的な大きな転換点にある現在、わが国には大きな潜在力がありながら、世界における存在感は縮小の一途を辿ってきた。“失われた20年”と云われた20年余りの間、最近でこそ、アベノミクスによる経済浮揚やオリンピック招致の影響により、世間に明るさが戻ってきた観があるが、さまざまな基本的な問題は解決してないのである。それどころか、戦前の歴史への長年の思考停止によって、わが国から「国民の誇り」や「国家の大義」が消失し、モノづくりの生産現場までも消えかかっている今日がある。内向きで誇りを失い、自信喪失に陥っている理由の一つは、明らかに先の戦争に対する考え方や、戦後の過ごし方にあるといえよう。新グローバル化時代にあって、私たちは今、日本の未来にむけたビジョンについて、思考停止状態から脱しなければならない。

歴史の転換点は創造革命で

「連続と変化」を繰り返して発展してきた日本は、実は6度目の危機の最中にある。一回目（古代～平安時代初期）、三回目（戦国時代～江戸幕府開設）、五回目（戦前・戦後にかけて）の危機では、それまでの外部適応型社会（父性社会）の末期的混乱から安定した内向慈愛型社会（母性社会）への転換で乗り切ることができた。ここで父性、母性と云っても男性、女性とは関係ないことは勿論である。また二回目（平安末期・鎌倉幕府設立）と四回目（幕末・明治維新）の危機は、逆に穏やかな母性社会が過度に進み退廃的な矛盾から衰退期を迎えたが、いずれも外部適合を求められた危機であった。危機克服の形が、①戦乱による国家衰亡

という危機からの脱却、②内向きで退廃衰亡する危機からの脱却と交互に到来してきた。今遭遇する六回目の危機も、②型の過度に内向きの母性型社会からくる衰亡であり、いまは外部適応型社会を目指し、未知の世紀を開拓してゆく気概が求められ、グローバルに展開する創造革命で応えてゆく時代なのである。

対立する地球文明を乗り越えて

次には、対立する地球文明という世界観で日本の立ち位置を見なければならぬ。世界の大国は、殆ど例外なく、優勝劣敗の「力と闘争文明」原理を基盤にして発展してきたが、日本だけが「自然との共生」を知る文明原理に基盤を置いてきた。「力と闘争」原理ばかりでは、宗教や資源を巡る闘争が絶えず、21世紀の地球は滅びざるを得ない。私たちが世界と向き合うためには、日本が本来立脚する「自然との共生」のみならず、世界が立脚する原理を併せて複眼思考で見てゆかねばならない。21世紀世界の調和ある発展のためには、「自然との共生」が欠かせず、日本自らは同原理を基盤にしながら、国際社会に伍してゆかねばならない。それには日本国民に自信と誇りに満ちた「強き心」を取り戻すことが不可欠で、それでこそグローバル社会に於ける日本の使命が果たせるのである。

新たな価値観は日本固有文明への覚醒から

三番目には、新しい価値観をあげねばならない。日本人の心性「Jマインド」の概念が重要である。このことで日本人の資質や能力が問われている。稲盛和夫氏による個人を対象にした名説、「成功のための方程式」（人生の結果＝考え方×熱意×能力）を拡大し、企業や社会に適用して、単純な概念図「成功度仮説」（図1参照）を導き出した。この仮説は物事が何故、成功したり、失敗するかの目安を示している。

日本人の心性を「Jマインド」、正の心性を「+Jマインド」、負の心性を「-Jマインド」と命名した。個

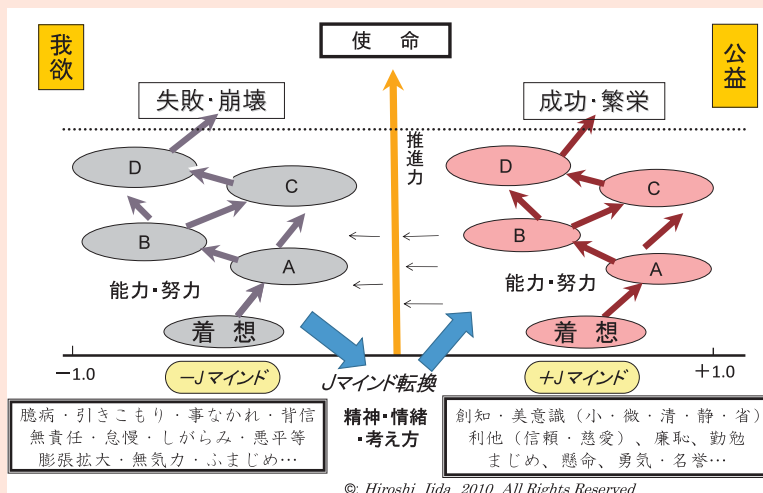


図1 成功度仮説と正負のJマインド

人は勿論、企業経営に適応した場合、いかに企業が優れた潜在能力をもっている、また多くのエネルギーを事業に投入し、努力に務めても、それを支える精神・情緒や物事の考え方など立脚点が負の心なら、失敗・崩壊に繋がる。また国民の潜在能力が優れ、いかに努力をしても、国民精神がマイナス側（左）に立脚すれば、国家が立ち行かない。こうした社会の負の要因をできるだけ抑制し、国民の心性をプラス側（右）に転じなければ、社会がプラス側に転ずることはない。

臆病、引きこもりなど敗北主義、事なかれ主義、無気力、無責任など負の心性「-Jマインド」に立脚し、我欲に取り囲まれて、ことを進めれば、いかに頭脳明晰なリーダーが多く、努力を傾けても、社会の迷走を食い止めることは期待出来ない。誰の目にも明らかな社会倫理の頹廢の芽を摘み、戦後教育の刷新を図るなど正の心性に基づき、国民の自助努力などに覚醒する理性を育てることなく、眼前の課題解決にむけた努力をしても実りある社会は到来しはしない。かかる「Jマインド」の転換こそ喫緊の課題なのである。

日本人の誇りと気概を育てる教育を

日本列島は自然に恵まれ、四季折々の変化が巡る自

表1 成功に導く日本人の心「+Jマインド」

要素区分	日本人の心「+Jマインド」
自然観	自然順応、再生、循環、共生、同化 天恵（光・水・緑）
美意識	優美、幽玄、枯淡、簡素、静寂、清浄
行動性向	微細・繊細、小型・携帯、融合、省、縮、勤勉、 几帳面・けじめ、まじめ、求道、勇気、懸命
道德規範	和、利他心、廉恥、信頼、礼節、謙虚、慈悲、 誠実、名誉

然環境の中で、稲作文化が定着したことにより「自然観」が生まれ、そこから「美意識」が芽生え、そして、狭い国土に多くの人口を抱え、鉱物資源の寡少な制約のもとで生まれた「行動規範」、社会における「道德観」が身についた。ものごとを成功に結び付ける日本人の「正の心性」（+Jマインド）とは、数々の成功事業を分析し、おおよそ表1に纏められる。

日常生活の場においても、事業経営においても、人々がこうした規範に従って、行動すれば、社会から次第に負の心性は薄らいでゆくであろう。

20世紀全般を通し、日本の誇るべき第一のことは、世界から植民地支配をなくし、人類みな平等という世界理念を作るのに、最大の貢献をしたことである。第二に誇れることは、20世紀最大の発明である「狭くて人口が多く、目ぼしい資源もない国でも、豊かになれるという日本型発展モデル」を作り、世界に多大な影響を与えたことである。

Jマインド・イノベーションの契機

今なお、日本人に傷痕を残す戦前の贖罪意識に根差す敗北主義から逸早く決別し、勇気をもって誇りの回復に努めて欲しい。21世紀の日本の使命は何か。エネルギーや鉱物資源を千年持続型で賄える文明を創り上げ、叡智を傾けて地球から貧困を無くすことである。「+Jマインド」で押し広げる化学の領域は無限である。自然と共生原理で生きる日本人がアグリビジネスや水ビジネスを通して自然観を取り戻し、清浄な環境を作り、優美で簡素な美意識で生活空間を満たすこと。また、日々の営みに必要なエネルギーを少なくするよう努力し、過度な物質依存からの脱却を促す微細技術で新産業をつくり、他人のため社会のために行動を起こせば、わが国は見違えるほど甦ることは間違いない。

◆参考：飯田汎『岐路に立つ日本の行方 再び開拓創造の躍動感を』丸善ブラネット2010。

© 2014 The Chemical Society of Japan

ここに載せた論説は、日本化学会の論説委員会が依頼した執筆者によるもので、文責は基本的には執筆者にあります。日本化学会では、この内容が当会にとって重要な意見として掲載するものです。ご意見、ご感想をお寄せ下さい。
論説委員会 E-mail: ronsetsu@chemistry.or.jp